

防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

7

2018

No.560

特集

- コンクリート構造物のひび割れ・剥落対策
- 今がチャンス!の省エネ改修



タイル製造業界は絶滅危惧種!?

鈴木 哲夫

最近の建物の外壁は、ほとんどと言ってよいほどタイル張りである。使用されるタイルは、国内産もあれば輸入品もあり、デザインも豊富にあるが、安定した供給が続くかどうかは、粘土を継続して採掘できるかにかかっている。

タイルの出荷量は、グラフのように新設住宅着工戸数をはじめとする社会経済の動向を投影し、10年ほど前から落ち込んでいる。特にモザイクタイルの出荷量は、ひと頃の約半分と落ち込み幅が大きい。モザイクタイル(50二丁掛けタイル)は、マンションでの使用が多いためである。

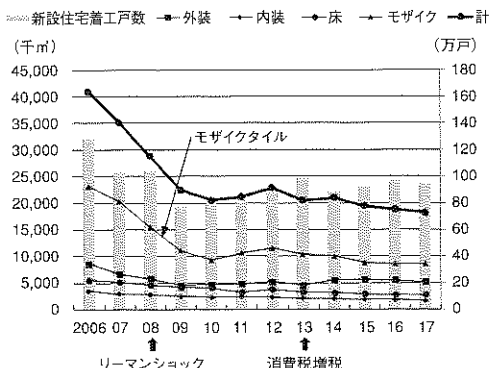
この需要の減少が粘土採掘業者の経営を圧迫する一方で、粘土の値段が下落し、採掘の採算が取れない状態が続いている。そのため、採掘業者の間で採掘場を畳んでしまうケースが増加し、廃業が進んでいると聞く。そして、跡地にはマンションや大型店舗が建ち、粘土の採掘を再開する道も半永久的に絶たれてしまうのである。

粘土が取れないために、窯元と釉薬業者および加工業者も衰退し、図に示す負のスパイラルに陥っている。窯元の廃業が相次ぎ、新築時に使われたタイルが廃番になって入手できないケースが目立ってきた。

さらに釉薬業者においては、粘土原料の枯渇や高騰だけでなく、着色剤や顔料に含まれる有害化学物質の法令規制が追い打ちとなり、以前と同じタイルの色を出せなくなっているのが現状だ。タイル業界全体が疲弊し、タイルの再現不能や供給不全へとつながっているのである。

改修工事では、タイルの張替え補修に悩まされることが常である。部分的に修復するため、新旧のタイルが同居することになるので、ただでさえ色ムラが目立つのだが、素材そのものが採れないとなると、色合せはさらに難しくなる。特に無釉タイルは深刻だ。似ていても土が違えば、素材の風合いはどうしても出せない。10年ほど前に製造されたタイルでも手に入らない事態が増加傾向にあり、絶滅危惧種となっている。このようなタイル業界の窮状を放置してよい訳がない。国からの支援施策が必要ではないか。

少なくともマンションにおいては、定期的な大規模修繕工事が位置づけられていることから、タイル張りの建物では、タイルの調達が年々難しくなると推測される。直近の大規模修繕工事の折に当面のストック分を確保するとしても、いずれ限界はやってくるはずだ。



グラフ タイル出荷数量と住宅着工戸数の推移 (出典：経済産業省生産動態統計年報)

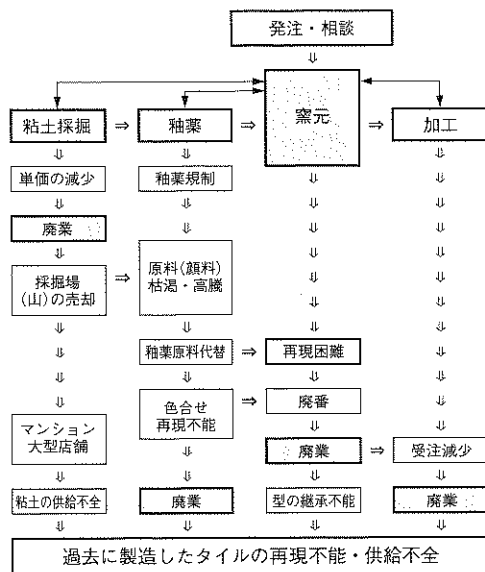


図 釉薬タイルの再現供給事情

((有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役)